

# 国学者 伴信友

## 天保国学四大家の一人

伴信友は、安永2年(1773年)の2月25日、小浜藩士、山岸惟智、母さよの四男として小浜に生まれました。

この頃、小浜藩には小浜の「順造館」と、江戸には下屋敷に「講正館」、上屋敷に「信尚館」、中屋敷に「必観楼」という藩校があり、学問の系統は初代小浜藩主酒井忠勝の時代から、江戸幕府の方針に従って朱子学を藩の学問として取り入れ子弟教育に力を入れていました。信友も8歳になると「順造館」に入り、まず朱子学を学びました。信友は学問が好きで研究心があり、熱心に勉強したので藩校でも評判でした。14歳のとき、江戸の小浜藩に仕える伴信当の養子となり、翌年の天明7年(1787年)に江戸に移り住みます。そして伴家の娘美尾と結婚した信友は伴家を継ぎ、江戸の小浜藩に勤め、藩の仕事に従事しました。

この頃の江戸は、江戸文化が最も発達し、画家や文人、学者等多くのすぐれた人材がいました。特に小浜藩は解体新書を著した杉田玄白や中川淳庵、儒学者の山口管山、国学の東條義門など他の藩には見られない人材豊かな時であり、信友はこれら藩内外の当代一流の人たちとの交流を通して様々な学問に触れ、向学心をますますかきたてていきました。

29歳のとき信友は国学者の本居宣長の本を読み敬服し、その教えを受けたいと思います。そこで、門人である村田春門に仲立ちをしてもらい入門を希望しましたが、春門の手紙が届くわずか数日前に宣長は亡くなっていました。しかし宣長の養子本居太平は、信友の志に感動し、信友を宣長没後の門人として認めてくれました。本居門下となった信友は宣長に直接教えを受ける事はできませんでしたが、宣長を慕う心は変わらず宣長の学問を誰よりも正しく探求していきます。

やがて、信友は国学者として考証学を中心に文献的な方法で神話や歴史、古典の研究へと学問を進め、文政4年(1821)49歳のとき、小浜藩の仕事を引退して国学の研究に専念していきます。

天保14年(1843)、藩主酒井忠義が京都所司代に命ぜられ息子信近が藩主に従って京都へ行くことになり、家族について信友は京都へ行きます。そして3年後の弘化3年(1846)10月14日、信友は74歳で京都所司代内の邸でその生涯を閉じます。

信友は生涯にたくさんの研究成果を残しますが、その出発点は多感な少年期を過ごしたふるさと若狭であり、若狭地方の歴史や神社等の研究です。若狭を愛する心、ふるさとを想う心がいつも信友の中にはあったのでしょう。

信友の著書は100部を越え、校訂した本500部、編集10数部、また和歌は2000首にもものぼり、平田篤胤、香川景樹、橋守部らと共に「天保の四大家」としてその名を歴史にとどめ、明治以降の古典、国史等の研究に大きな役割を果たしました。そして現在も多くの研究者が信友の学説をいろいろな書物に引用し、今も信友の研究が生きています。



☆朱子学…中国の宋時代に朱熹らによって大成された儒教の学説。日本では、江戸時代幕府の官学とされた。

(林羅山)

☆国 学…文献学的方法を中心に、日本に古くから伝えられてきた「古事記」や「日本書紀」など日本古典および古代文化を研究して、日本人が大昔から持っていた心を探ろうとする学問。

(新井白石→荷田春満→加茂真淵→本居宣長→伴信友)

☆考証学…物事を細かく調べて、古い事実を明らかにしていくこと。信友は歴史や神話、物語、地名、寺社、和歌、さらに植物や動物、武器にいたるまでいろいろな名前の由来や伝説等を調べ上げ、あやふやに伝えられている事柄を、多くの書物等と照らし合わせて明らかにした。信友の得意とした学問。

☆平常遺言…「いまには、何をかいはんよの常にいひし言葉ぞわが心なる」信友の辞世の句であり、信友が生存中の日ごろ言っておいたことが皆遺言であるという意。信友の「平常遺言」として有名な言葉である。

### 伴信友の代表的な著作

- 「若狭旧事考」  
「若狭」の国名の起源をはじめ、郡郷名などについて研究詳述したもの。信友の愛郷心が表れています
- 「比古婆衣」  
随筆集。信友の代表作として特に有名である。
- 「長等の山風」  
壬申の乱に関する精細な研究をまとめたもの。
- 「神社私考」  
実証的な神話学
- 「神名帳考証」  
実証的な神話学

## 伴信友の時代 ～略歴～

西暦	年 号	事 項
1773	安永 2	若狭小浜の竹原的場前（現若狭高校敷地内）の山岸家に生まれる。
1786	天明 6	小浜藩士伴信当の養子となり、翌7年江戸の伴家に移る。
〃	〃	妙玄寺（東条）義門生まれる。
1788	8	御広間面番御当分御雇となり、以後小浜藩士として仕える。
1790	寛政 2	稻庭正義著「若狭国志」を雇人に写させ、以後多く加筆増補する。
1794	6	伴信当の娘美尾（14）と結婚。
1798	10	本居宣長「古事記伝」全44巻完成。
1801	享和 元	本居宣長に入門申し入れを村田春門に仲介依頼。
〃	〃	本居宣長没。その養子本居太平の配慮にて宣長没後の門人となる。
〃	〃	杉田玄白「養生七不可」を印刷し、知友に与える。
1805	文化 2	本居太平の紹介にて平田篤胤初めて信友を訪問。
1806	〃 3	小浜藩主酒井忠貫没。忠進藩主となる。
〃	〃	実父山岸惟智没。養父伴信当没。伴家の家督を相続する。
1808	〃 5	杉田玄白宅にて大槻玄沢に会う。
〃	〃	藩主酒井忠進京都所司代就任に伴い信友京都堀川へ引っ越す。
1811	〃 8	長女八十小浜藩の奥医小杉玄民の長男玄適と結婚。
1814	〃 11	8年より東寺文書の若狭関係記録を書写し「東寺古文零聚」編集。
1815	〃 12	藩主酒井忠進老中となる。信友江戸牛込屋敷へ移る。
〃	〃	杉田玄白没。
1821	文政 4	信友隠居し長男信近家督相続。以後学問に精励し著作活動を継続。
1823	〃 6	東条義門の古今集講義に出席。義門、信友を訪問し「友鑑」解説。
1825	〃 8	二十数年前から考究を重ねた「若狭旧事考」成稿。
〃	〃	ロシア漂流より帰国の大黒屋光太夫を訪ね「光太夫譚」を記す。
〃	〃	「鈴屋翁略年譜」案文できる。翌9年完稿、12年刊行
1828	〃 11	藩主酒井忠進江戸藩邸にて没。
1837	天保 8	妻美尾没。江戸大願寺に葬る。
1843	〃 14	東条義門没。信友直ちに遺族に追悼歌を送る。
〃	〃	藩主酒井忠義京都所司代に就任。信友京都へ。
1846	弘化 3	10月14日、信友京都所司代官邸にて没。18日小浜発心寺に埋葬。